

東洋文化研究所紀要 第168冊
平成 27 年 12 月 抜 刷

収支記録から見た徽州家庭の日常生活
——清代の祁門王氏の家計帳簿を中心に——

熊 遠報

收支記録から見た徽州家庭の日常生活

——清代の祁門王氏の家計帳簿を中心に——

熊 遠報

一、はじめに

文献や実物資料から見れば、14世紀から20世紀前半にかけて、徽州文書は、他地域では匹敵できない多様な資料を有し、最も日常的レベルの社会経済史研究に適し、さらに伝統中国社会の全体を把握する際に多くの穴を埋め、新知見を提供できるはずであるが⁽¹⁾、豊富な日常レベルの社会経済資料を有する地域の実証やミクロの研究、即ち、個別的研究、或は地域研究関連の量的蓄積は、理論や方法面から伝統中国を全体的に把握、認識を行なう際に、はたしてどのような寄与ができるのであろうか。

ここで取り上げるのは、清代、徽州地域における家庭生活の收支記録である。長期的に経営資料を蓄積するためでもなく、何らかの法律や条例によって決まった收支等の明細の保存、記録の必要もなかった伝統中国社会において、家庭、会社関連の帳簿がなぜ作成され、残されていくのか、徽州地域の收支記録等に即して考えてみると、一般的メモ以外、以下の二つの要素も重要である。

1、一生活単位=家庭の責任者(家長)は、明清時代、長期的に徽州地域にいないケースが非常に多かった。家長、或は主要な男性メンバーが長期的に同居していないのは、空間上、複数の経済活動や生活の現場を持っていたことを意味する。即ち二つ、ないし二つ以上のところに各々経済活動に従事し生活を営むのは、故郷の家族=子供、老人と女性を中心とする生活の現場におらず、

その日常的な収支を即時に処理できなくなるわけである。しかし、個人・家族の信用と社会関係の創出・維持の責任を背負っていて、家族全体の資産（債務や債権）管理、日常的の支出や生活費の捻出に責任もあるが、大きな空間距離を離れたまま、緊急的、即時に徽州の家族関連のことを決断できない場合もしばしばあった。しかも故郷に帰省する短い時間は規則的ではなく、数年間一回のケースが多かった。そのため、徽州における家族の収支状況を把握する詳細な記録が要求されていた⁽²⁾。

2. 徽州商人、或は徽州人の経営活動において、合股経営（会社）体制は、普遍的なことであり、多くの権利者に経営収支、また財産管理の手続や処理のプロセスなどに関する詳細な記録が要求されていた⁽³⁾。

伝統中国社会における個人、商号、社会集団レベルの帳簿関連の資料は、明清以来、特に清代、民国時期、徽州のものが多く現存している。公的図書館、博物館及び個人に所蔵されているが、その中の一部は既に『徽州千年契約文書』（清民国）などの形で公刊されている。本稿では、中国社会科学院歴史研究所に所蔵されている雍正、乾隆年間の休寧黄氏の家庭収支帳簿を参照し、清代祁門の『王氏帳簿』、特に王氏家庭の収支記録を整理し、その帳簿の社会経済的価値に関して検討してみたい。

二、『王氏帳簿』と王氏家庭の日常支出

（一）、『王氏帳簿』の由来

筆者は、2000年頃黄山市の骨董屋から52冊の帳簿資料を購入した。帳簿と関連性がない一冊を除き、51冊は、一つの関連資料群であると考えられる。資料は、購入の時点、既に腐乱していて、ほろほろで利用されにくい状態であった。2012年7月に南アフリカで開催された世界経済史学大会での報告「互酬と貯蓄の間——徽州『銭会』に関する社会経済学的解釈」を準備する際に、その

中から銭会の原始的記録、即ち伝統中国における民間の金融組織に関する資料を二冊見つけた。それは、51冊の帳簿に属するものであり、文献の形態や氏名などから同じ持ち主のものであると判断できる。

こうした資料の由来について骨董屋の店主からは旧徽州のここらあたりから持ってきたという漠然な情報しかなかった。帳簿には『本村』（嘉慶3年）、『家支』（嘉慶7年）などのタイトルや具体的収支細目、また時期に関する明確な記録はあったものの、持ち主、持ち主の出身関連の情報は不明で、どこのものなのか、だれのものなのかについては、分からなかった。

しかし、道光年間の銭会資料の組織者や参加者の氏名等を調べていると、“本位”、或は“万順”、“万順号”、“王万順”という持ち主関連の表現があった。帳簿の関係人名・地名（村レベル）について特定できないが、少なくとも持ち主は王姓であると判断できる。幸いなことに、帳簿資料の『本村』（嘉慶3年）、特に『家支』（嘉慶8年）には乾隆年間の活動に関する追記があった。地名、持ち主の姓名に関する情報ははっきりわからなかったが、この僅かな資料によれば、持ち主は乾隆42（1777）年に誰かと一緒に“観音楼万順酒坊”を起業し、何らかの理由で経営不振による損失が出たため、同じ年、店を他人に譲渡した。二年後の乾隆44年にまた「祁城東街口」に酒を売る店を開き、間もなく食用油、塩、米などを販売し、経営規模を拡大した。しかし乾隆53年5月7日（旧暦）に大洪水によって店は流失し、店の合弁者張氏兄弟も亡くなり、店関連のものは殆ど失ってしまった。その後、融資と合弁者の調整を通し、改めて「泰来塩店」、「万順煙店」、「永春米店」等の日常生活用品を売買する店を次々に興し、商売を続けていた。しかも砂糖や「京貨」の販売を行なう商売の地理範囲は遠隔地の江西の饒平、安徽省（安慶？）などの場所にも及んでいた。県城の施設、家屋、田圃等を流失させ、死者が六千人余り出た乾隆53年5月6、7日の大水災について、徽州府の『祁門県志』には明確な記載がある⁽⁴⁾。これによって、王氏は祁門県の出身者であろうと推測できる。

しかし明清時代、祁門は、徽州西部の県として、2200平方キロ余りの面積と多くの人口数を有し、約85%の地域が樹木等に覆われて、交通も非常に不便な山間部である。多くの王姓住民の中から持ち主を特定するのは簡単ではない。

ところが、同じ文書群の銭会文書には道光13年に「永慧庵」の作った融資組織の「谷会」がある。「永慧庵」に関して同治『祁門県志』には「下箬坑にあり、王姓が建て、咸豊5年に戦火によって壊された。王姓が改めて建てた」という記載がある⁽⁵⁾。親友の交際や買い物を行なう際に『家支』に登場した地名「閃里」, 「正沖」, 「彭龍」などは、箬坑と近い村、鎮の名前である。そのほか、『本村』(咸豊5年)と『本村』(咸豊6年)という帳簿に現れた人物の中で咸豊6年から8年にかけて、太平天国と戦う際、戦死した王全壽、王当発、王廷雲、王維南、王愛得、王国能等は、同治『祁門県志』の記載によれば、出身地がみな箬坑である⁽⁶⁾。以上の各資料を合わせて考えると、この52冊の文書群は徽州府祁門県箬坑村王氏の一家族であると言える。

(二)、『王氏帳簿』の持主と祁門箬坑王氏

『王氏帳簿』の量が多くて、様々な利用の可能性がある。注意すべきことは、家庭収支を一般に記録する以外、『家支』(嘉慶8年)70 - 75頁, 85 - 91頁「炳記」, 76—84頁「尚記」という分節的な年間収支記録であり、最後のページに「光頭学用」という特殊の支出記録もあった。これは帳簿の持ち主に関連する重要な情報であり、収支や生活単位、人員構成と構造などの問題を考えさせるが、「炳記」, 「尚記」, 「光頭」の詳しい意味は、不明である。

中国国家図書館古籍部に所蔵される嘉慶5年『環溪王氏統修家譜』は、祁門王氏の族譜であり、判型は大きいものだったが、上下二巻からなる族譜は徽州地域の族譜と比べてその内容は必ずしも判型に合わず、一族関連の情報量や個人関連の記録も少なかった。系譜と簡単な伝記資料が族譜の主要な部分である。その中に30世の王啓邦について「字懷万、生康熙庚子(58年、1720)四

月初一、於乾隆壬寅（47年、1782）正月初七歿。……配文堂陳氏富芳，生康熙丁酉（56年、1717）十月二十一、於乾隆乙卯（60年、1795）歿。側室程氏生雍正甲辰。陳生二子敞，要」と記録されている。その家族については、啓邦の長男元敞は、「国学（生），小名黒，又名永長，字尚文，生乾隆戊辰（13年、1748）五月十六，配閃里陳氏国英，生乾隆己巳（14年），子瀚」，次男元要是，「国学（生），字丙文，生乾隆庚辰（25年、1760）二月初七，配文堂陳氏玉梅，生乾隆辛巳。子三：濂，治，潤」と記されている。元敞の長男兆瀚について嘉慶5年の族譜は「又名燿，小名光顕，字浩川，一字舍光，号晓山，生乾隆丁酉（42年、1777）四月十二」と記されている⁽⁷⁾。

以上の記載によって、帳簿に現れた「炳記」，「尚記」，および「光顕」，また「万順号」という標記は，環溪王氏30世啓邦，31世元敞，元要，及び32世兆瀚の字，名にかかわるものであったことがわかる。これによって前述した文書群は，徽州府祁門県箬坑王元敞の家族関連のものであり，嘉慶時期の帳簿は王元敞の手によったものか，或は王元敞が主導したものと確認できる。

箬坑とは，現在の黄山市祁門県箬坑郷の村で，清代，徽州府祁門県の十九都に属した。箬坑の環境について，以下の地図に示したとおりである。



地図1 明清時代の徽州府，祁門県の位置

祁門縣志

卷首

圖

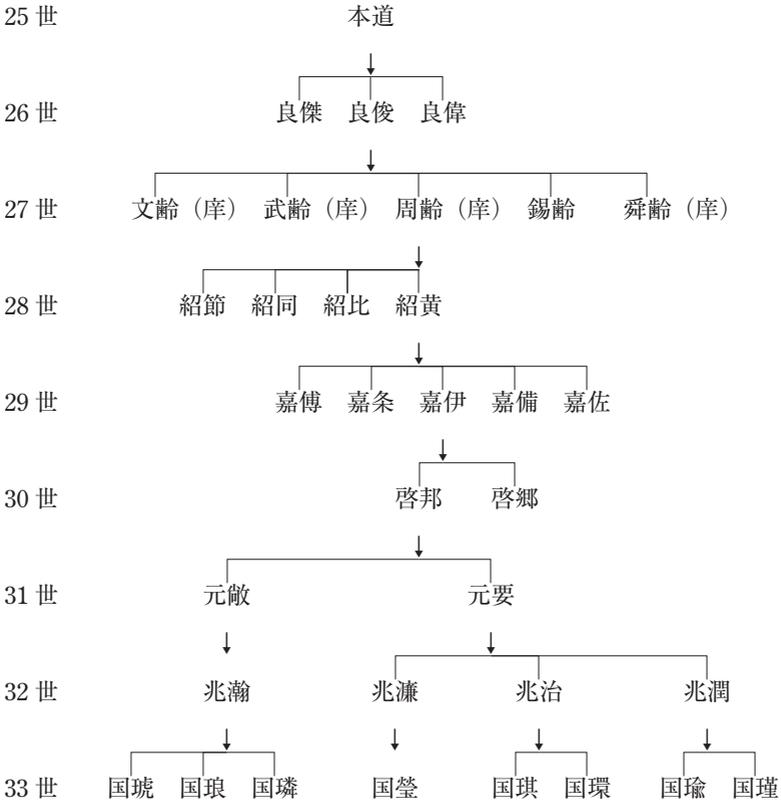


地図 2 箬坑村の位置
出典：同治『祁門縣志』

王氏について、族譜によれば、唐朝の尚書を務めた王璧は新安王氏の始祖であり、祁門箬坑王氏の始遷祖は14世の文保公である⁽⁸⁾。嘉慶譜の18世以前の系譜関係や人物の事跡などは非常に簡略であり、関連の歴史に対して編纂者は的確な知識をあまり持ってなかったようである。19世から乾隆、嘉慶時期にかけては箬坑王氏一族には社会的に影響力がある人物はいなかったが、武生員の資格をもっていた25世の王本道は、明の万暦年間、下級武官として出世し、苗族反乱の鎮圧に関わっていて、祁門地方の有名な人物となった。王本道を除き、今日まで箬坑王氏は、政界、商界において影響力のある人物が殆どおらず、徽州地域においてごく普通の宗族である。

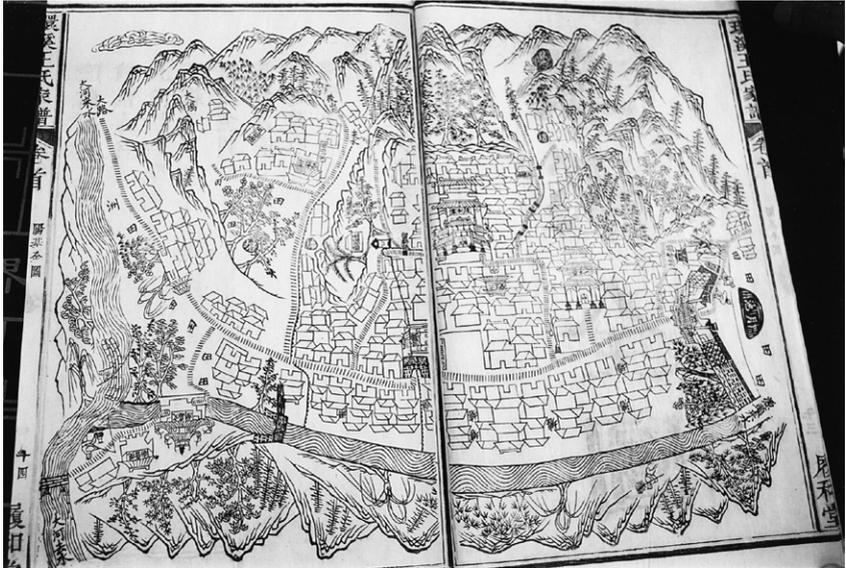
しかし明末清初、本道の三人の息子の中で、26世良俊は、三人の妻（原配、継配、後配）を持ち、五人の息子をもうけて、地方社会において尊敬される「郷

飲正賓」であり、五人息子の中の四人は生員になっていた。27世の周齡も生員の資格を持ち、四人息子の中の28世の紹節も生員の資格を持っていた。28世の紹黄は二人の妻をもち、息子五人をもうけた。29世の嘉伊は三人の妻を持っていて、息子の啓邦、啓郷をもうけ、次男の啓郷を兄の嘉傅の養子にさせた⁽⁹⁾。この家族は、25世本道の経済力と政治的影響力を受け、科挙受験や経済活動などに励んで、長い間、地域社会における名望家としての地位と高い経済力や社会地位を保ってきた（「本道の系譜略図」参照）。



「本道の系譜略図」（嘉慶家譜と光緒家譜による作成）

箬坑は、上箬坑と下箬坑という二つの集落に分けられて、帳簿のタイトル「本村」、「上若」等の記録方式によれば、文書群の所有者は下箬坑に住んでいたとわかる。下箬坑は、祁門の西北の山村で、県城と約60キロ離れ、古い時代から耕地が少ない地域である。王氏を中心とする住民は、山麓と二つの河川の間に家屋を建てて集落を形成し、狭い土地でトウモロコシ、米などの食糧生産、林業、茶の栽培などを営んできた（地図3「箬坑村落図」参照）。



地図3 箬坑村落図

出典：光緒『環溪王氏家譜』（箬坑王氏家蔵）

2013年8月17日と2015年3月7日—8日に筆者は箬坑村を訪問して、族譜資料や現地の状況に関して村の幹部、教師、村民に調査を行なった⁽¹⁰⁾。現在の箬坑村は、330余りの世帯、1100余り人口を有し、住民の中で王氏は主な姓氏で総人口の約80%を占めており、張、呉、李、汪等の姓氏もあり、低い山麓に位置する集落には伝統的景観が多少保たれている。県道で村と県城は繋がれていて、定期バスが毎日何便か運行している。王氏一族は、活発な宗族活動を行

ない、祖先の祭祀と「宗親会」という組織を通して、同姓関係者のつながりを強めて、王氏の祠堂「履和祠」を再建した。



写真1 光緒『環溪王氏家譜』



写真2 箬坑村



写真3 再建された箬坑王氏宗祠

(三)、『王氏帳簿』の種類

52冊の『王氏帳簿』にはタイトルや時間の明記されるものもあれば、明記されておらず、または虫喰いや湿気によってタイトルや時間等がわからないもある。帳簿の時代、内容等を明らかにするため、その内容を整理したのが以下の『王氏帳簿』目録である。

【『王氏帳簿』目録】

乾隆時期（1冊）

1. 『租簿』（乾隆60年から）

嘉慶時期（12冊）

2. 『客号貨源』（嘉慶2-4年の記録）と『嘉慶二年支収伙足帳』（2-3年）
3. 『本村』（嘉慶3年 帳簿主と村内の人々、組織との債務——取引に関する記録）
4. 『家支』（嘉慶7年 嘉慶7-8年家庭収支記録）
5. 『収各蓬（棚）分租総帳』（嘉慶11年）
6. 『彭邑収玉米』（嘉慶15年）
7. 『彭邑収玉米流水』（嘉慶15年）
8. 『（各棚収玉米）？』（表紙とタイトルはない 嘉慶15年）
9. 『（収玉米）？』（タイトルはない 嘉慶16年）
10. 『収玉米帳』（嘉慶16年）
11. 『西源』（嘉慶16年 乾隆38—60年、主に嘉慶初年—15年関連の債務記録）
12. 『収米帳』（嘉慶17年）
13. 『収青茶流水帰位』（嘉慶17年）

道光時期（8冊）

14. 『？』（道光8年 タイトルは破損、収支帳）
15. 『家支』（道光10年、10-11年）
16. 『家支』（道光14年 14-15年）
17. 『家支』（道光16年 16-17年）
18. 『家支』（道光18年 18-19年）
19. 『家支』（道光26年 26-28年）
20. 『家支』（道光29年 道光29-30年—咸豊元年—2年）
21. 『？』（道光10年 道光8年—咸豊5年、銭会の記録）

咸豊時期（24冊）

22. 『家支』(咸豊3年 3 - 5年)
23. 『収支帳簿』(咸豊3年, ——6年)
24. 『上若』(咸豊3年 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
25. 『屢年付親友往来』(咸豊5年)
26. 『貨源』(咸豊5年, 商店の商品関連の帳簿)
27. 『?』(咸豊5年, 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
28. 『本村』(咸豊5年 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
29. 『上若』(咸豊5年 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
30. 『西源』(咸豊5年 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
31. 『東源』(咸豊5年 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
32. 『各荘』(咸豊5年 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
33. 『家支』(咸豊6年)
34. 『本村』(咸豊6年 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
35. 『貨源』(咸豊6年, 商店の商品関連の帳簿)
36. 『西源』(咸豊6年 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
37. 『東源』(咸豊6年 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
38. 『上若』(咸豊6年 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
39. 『?』(咸豊6年 タイトルはないが, 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
40. 『貨源』(咸豊7年, 商店の商品関連の帳簿)
41. 『西源』(咸豊7年 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
42. 『?(貨源?)』(咸豊8年, 商店の商品関連の帳簿)
43. 『借会帳簿』(咸豊8年 銭会の記録)
44. 『騰清』(咸豊8年, 貸借 = 商品等の取引関連の記録)
45. 『逐日流水騰清暫記』(咸豊9年)

同治 (2冊)

46. 『母喪柩来往総帳』(同治4年)

47, 『周公祀糶谷収支総登』(同治5年)

時期等不明(5冊)

48, 『?』(時期, タイトルも不明, 収支, 貸借関連の記録)

49, 『?』(時期, タイトルも不明, 租帳, また銭会関連の記録もある。道光年間か?)

50, 『?』(時期, タイトルも不明, 帳簿)

51, 『?』(時期, タイトルも不明, 雑貨帳)

52, 『信書』(手紙を書くマニュアル, 民国時期のもの)

『王氏帳簿』の文献形態について大まかに家庭収支記録の帳簿9冊, 銭会記録2冊, 商店の貨物仕入れ関連記録5冊, 個人・組織と商品取引関連の支払記録, また債務記録24冊, 土地経営関連(地租収入)の記録8冊, 茶経営関連の記録1冊, 葬式関連の交際記録1冊, 共有地の食糧販売記録1冊, 書簡作成の手本1冊に分けられる。その中の記録は必ずしも表紙のように一つの内容のみではない。また1冊の中にメモが挟まれているケースや後ろに別の内容を記録する場合もあった。時代が不明のものと『信書』を除外して, 最初の帳簿は, 乾隆60年(1795)の『租簿』であり, 遅い時期は, 同治五年(1866)の『周公祀糶谷収支総登』である。

記録の内容から見れば, 乾隆30年代, 40年代に遡ることがあり, 主に嘉慶初年から同治年間まで約百年間, 家族の経済生活と経営にかかわるものである(18世紀末から19世紀60年代にかけて)。この帳簿群に記録された内容から以下の特徴がみられる。(1), 日常的な経営活動における個人, 商号, 社会組織などに関わりながら, 取引関連の債務・債権の記録は多い。(2), 家庭の収支記録, 即ち家計簿は, 非連続であるが, 21年間にわたるものもある。(3), 租佃関連や食糧収支関連の記録がある。(1)から(3)までの部分は半分以上の量を占める。それ以外に, 銭会=金融関連の記録, 商品仕入れと取引関連の「貨源」記録も特徴的なものである。また記録の時間は, 連続的なものもあったが, 欠如

部分が多い。この家庭の收支記録の習慣を考えると、関連の帳簿は、全部揃えた場合百冊を遙かに超えると推測できる。

(四)、王氏家庭の日常生活支出

先に述べたように家計関連の收支記録はこの資料群の特殊な存在であり、毎年の家庭收支を記録する習慣から全部の帳簿が揃えた場、100年前後の記録があったと考えられる。筆者の手元には嘉慶7—8年、道光10—11年、道光14—15年、道光16—17年、道光18—19年、道光26—28年、道光29—30年—咸豊元年—2年、咸豊3—5年、咸豊6年等21年間の「家支」が残っている。一部の保存状態は良くないため、ここで嘉慶7、8年の家計簿を中心に、王氏の家計簿の状況や性格を初歩的に整理してみたい。

嘉慶7、8年の『家支』は、收支の単純な記録である。記録者は、収入と支出に分けて記録し、支出の部には殆ど毎日、品目、数量或は重量、またその一部の金額が記録され、一部の品目には支出の用途・目的も記録されている。支出の用途・目的が明記されていない多くの品目は、家庭の日常生活に使用したと考えられる。収入の部は、殆ど米、亥（豚肉）、玉子などのような実物であった。金額を記す時に銅銭と銀の二種類貨幣とその単位を使っている⁽¹¹⁾。しかし記録は完全ではない。支出の項目にももの・商品の品目と数量はあるものの、価格や金額が記録されていないものは多かった。収入の項目は少なく、貨幣ではなく、実物の数量で記録されていたが、記録されていない部分を除いて、支出はほぼ貨幣によるのであった。しかも年末の総計では支出は貨幣で記されているが、その貨幣はどのようなところから得たのか、また収入が実物だった場合、米等の実物から貨幣への換金関連の情報は帳簿に明記されていない。したがって二年間の收支に関して、同じ基準、即ち貨幣=金額の数字で、すべての收支品目を統計することはできない。年末の総計によって作成したものが表1である。

表1 王氏の家庭収支

支出者	嘉慶七年支出	目的	収入	嘉慶八年支出	目的	収入
房	錢262千827文	家支		錢294千267文	家支	
				銀80兩5錢	家支	
二房				銀431兩2錢7分	?	
尚記	錢9千714文	家支		錢折銀23兩8錢	家支	
炳記	錢15千276文	家支		錢折銀22兩4錢7分	家支	
光顯				銀並錢46兩6錢7分	学費等	
招子				銀並錢63兩1錢	嫁ぎ	
大房				銀587兩5錢1分	?	
収入			米130斛 (斛)			米136斛 (斛)
備考			1斛=1石			
総計	287千817文			銀1255,32兩, 錢294千267文		

『家支』(嘉慶7, 8年)により作成(炳記, 光顯, 招子に関する支出は記載のまま)

1000錢=銀1兩に換算すれば、一部の費用が計上されていないものの、嘉慶7年にこの家庭の日常生活支出は約銀300兩弱であり、徽州の家庭の生活消費を遙かに超えている⁽¹²⁾。嘉慶8年の収入部は米という実物のみが記録されて、貨幣に換算しても、約銀200兩くらいである。しかしその支出は、膨大なものである。嘉慶7年の例にしたがって考えると、一般の支出は錢294千、生活用は銀126兩あり、換算すれば銀400兩を超えている。

特別支出には、元敵の息子光顯の学費46兩、娘招子が嫁ぐ費用63兩があった。それ以外は、大房587兩、二房431兩の支出目的・用途は、投資か、商店の流動資金か、またほかの目的かは不明である。こうした規模の支出、また日常の生活支出は、生活レベル、消費構造や家族の規模に関わっている。嘉慶8年の支出に女性構成員の招子、下級科挙資格をもっている光顯の以外の光慶、光応、招福、招禄、招壽が塾(学校)で勉強していたと記載されている。また結婚した息子尚と炳、即ち元敵、元要がいた。こうした記録から家族構成員は十人を超えていたと推測できる。

招福、招禄、招壽は元要の息子兆濂、兆治、兆潤であり、嘉慶8年に16歳、9歳、6歳であった。光慶、光応は、元敵と元要の息子ではなく、いとこの息子、即ち父親啓邦の弟啓郷の孫の兆淇、兆浩であり、当時は14歳、12歳であり、嘉慶5年の族譜によれば、光慶の父親元良は外出し、行方は不明であった。光応は元恭の息子であり、二人男性兄弟の長男である。光慶は父親の関係で元敵、元要らの支援を受けており、光応は父の世代のいとこ関係を除いて、元敵、元要らの家族と何らかの形で養子の縁か何かを結んだと推測できる。

帳簿に記録される毎日の支出＝購入は、どのようなものであったのか。嘉慶8年の例を挙げてみよう。

「四月初一：亥（豚肉）二斤、付（腐）干弍（個？）、蛋錢600文、錢9800文糴谷」とあり、即ち旧暦の四月一日にこの家族は豚肉二斤、干豆腐二個、その金額がわからないが、銅錢600文で玉子若干を買った。また錢9800文で米を購入した。

「四月初四：錢116文買亥、錢75文轎錢、香油一斤」とある。四月四日に錢116文で豚肉を買ひ、錢75文で駕籠料を払った。また一斤の胡麻油を購入した。このように支出などの内容は、大体日常の食品、家庭の生活用具などである。

しかし、嘉慶8年の帳簿には栄養品と見なされる高級食材、つまり、豚、牛等の肉及びその内臓、魚、玉子等を購入したとする記載も多くあった。高級栄養品については、嘉慶7年にも以下のような関連の記載がある。

一月十四日「銀三両正、換高麗參」（銀3両で高麗人參を購入）

二月初四「錢1200文、鹿胎」（錢1200文で鹿の胎盤を購入）

三月十七日「錢3230文、換燕窩」（錢3230文で燕の巣を購入）

四月十八日「銀10両正換參、錢100文換參盤川」（銀10両で朝鮮人參を購入。錢100文は人參購入の交通費）。

当時の銀錢の相場は、大体1両＝1000文という基準で変化していた。日常生活に欠かせない米の価格は、嘉慶年間に上昇し、1石が2両前後で変動してい

た⁽¹³⁾。こうした経済・物価環境の中で食べ物の確保が精一杯だった普通の農民と比べると、王氏はしばしば燕窩、高麗人參等の薬用高級栄養品を購入した。

帳簿には日常生活の消費品を除き、納税について以下のような記載がある。

嘉慶七年四月十八日「銀10兩1錢8分，完糧」

十一月二十五日「銀9兩6錢2分，完糧」

八年五月十四日「銀6兩1錢1分，完糧」

嘉慶7年の納税額からこの家族は多くの土地、山林、或は共有地等を持っていたと推測できる。それ以外に、農業生産の関連施設整備などの投資、健康医療、学費、親戚・友人等との交際、演劇、交通などが重要な支出であった。

高級栄養品以外に、家族構成員の健康関連の支出回数は非常に多かった。嘉慶7年の状況について整理したものが表2である。

表2は医薬だけの記録で、医者への謝礼等は、「△△△兄」、「△先生」に対する謝礼、或は贈与などがみえるが、「△△△兄」、「△先生」に対する謝金は診療金かどうか、判断しにくい。医者のみならず塾の教師に「先生」の呼称を使っ

表2 王氏家族医薬支出

月	回数	金額	備考
1	7	293 文	高麗參銀3兩
2	9	605 文	洋參錢186文，鹿胎錢1200文，燕窩銀5錢，白蓮子銀4錢
3	4	1159 文	燕窩錢3230文
4	5	544 文	換參銀10兩，參價8，76兩
5	3	102 文	虎骨膠65（?）
6	5	208 文	
7	6	190 文	虎膠2兩（重さ）
8	2	64 文	
9	1	24 文	
10	3	114 文	
11	1	72 文	
12	1	997 文	
總計	47	4372 文	銀22，76兩，錢4616文，ほか

『家支』（嘉慶7年）により作成

ていたからである。年間 47 回、錢 4300 文以上の薬を買うのに診療費も低くなかったと考えられる。また表 2 の備考欄の物品は、薬剤として扱われたものに違いない。金額が付いていない一部の薬剤等を含めて、嘉慶 7 年の一年間の王氏家族の医療費は銀 30 両を超えていて、重い病気を抱えた重要な構成員がいたものと思われる。

一年間の日常生活では多くの細かい支出が存在していて、收支記録は必ずしも厳密ではなく、食品や家庭日用品の支出などには品目、価格、数量、購入日付、ないし目的・用途等が記録されている場合もあるが、こうしたすべての情報を含む記録は少ない。この家庭の一年間の主な支出は勿論家庭構成員の衣・食・住・行関連のものであるが、実際こうした記録の情報は完全ではない。この家庭一年間の支出の状況を把握するため、大きな（金額）支出、或は特殊な支出について整理したものが表 3 である。

表 3 は、嘉慶 7 年の月ごとの支出について金額の多い、主要、また特徴がある項目を整理し、作成したものである。実際、日常生活の消費品について、肉、魚、食材、調味料、また日用の品々、また社会関係の維持に欠かせない贈答品などは、殆ど名称や単位等が記録されているものの、金額はなかった。医薬関連の支出の表 2 を除き、家庭の教育等の支出について整理したものが表 4 である。

表 4 は、学校用品、先生への謝金、学生の学費・書籍・科挙の参加費といった教育関連の支出である。現金と実物の中で束修（謝礼）が大きな割合を占め、また書籍関連も大きな支出であった。その中で科挙試験の参加は徽州府内のみであったが、関連の支出は大きかった。また学校に関して、現金の学費だけではなく、学校用品の提供、先生の食事・食材などを経常的に提供していた。

表 2 - 4 の項目を整理してみると、嘉慶 7 年に王氏家族は医療と教育関連、納税に多く支出していた。日常生活と生産の中で、演劇の観賞、社会交際での轎の利用、貧しい人々への寄付を行う余裕もあった。

表3 王氏家族支出の主要な項目・金額

月	日常生活	社会交際	生産・投資・税	特殊事項
1		接維則兄轎馬銀1兩1分、維則兄謝銀2兩5分、錢66文送維則兄轎錢		戲3回錢150 + 200 + 90文、資孤100文
2	貨錢5830文辦燭		搬屋柱力錢2840文、錢192文完末英公糧	付動土錢500文
3	白糖、砂糖、蜜糖285文、土布3丈交連姉做衣、有信衣工錢233文、海參			接先生轎錢220文、銀2,5兩送陳先生
4	錢1000文還連姉、銀8錢海參	桃源接会課來使脚力錢60文	銀10,18兩分完糧、錢1000文田土整理	兵米錢15文
5		錢59文関帝会伙(食事会)		
6	銀1兩1錢対(兌)布		錢106文水利工事、錢120文車水	
7	錢140文釘木履			箔、錢98文資孤、錢200文回差出邑
8	錢30文補傘		錢180文土地整理、水利工事錢463文	買租簿紙錢570文
9	竹匠工錢468文		水利工事錢1652文	
10	錢840文(買)穀、錢230文綿花			
11	錢115文蜜糖、銀8錢整玻璃燈、錢215文硬炭	関帝会土地整理用錢44文	銀9,61兩完糧	銀3,1兩大嶺柴輪
12	錢100文整燈、錢931文買桁条、銀4,4兩買穀、錢7020文錫慶工錢		錢370文土地整理	

『家支』(嘉慶7年)により作成

この家庭の生活状況を継続的に観察するために、嘉慶8年の主要な支出について整理したものが表5、表6、表7である。

二年間の日常生活では金額不詳の食事関連事項を除いて、多額の支出は納税、医療費、教育費、食糧の購入であった。支出項目を調べると、嘉慶7年の

收支記録から見た徽州家庭の日常生活

表4 王氏家庭の教育関連支出

月	回数	項目・金額	項目・実物
1	1	買字銭 3000 文	
2	11	光応上学銭 100 文, 招壽上学銀 0,1 両, 銀 3 両束修, 学銭 500 文, 学銭 100 文, 銭 45 文 (整水桶)	元火 4 個, 炉 30 個, 亥 (豚肉) 6 斤半, 中和 1 両
3	3	光顯府考銀 10,11 両, 府考報名銭 74 文	香油 1 斤,
4	5	報銭 100 文, 学 100 文	瑞金半斤, 亥 2 斤半
5	4	光応学俸銭 400 文, 学銭 14 文	香油半斤, 亥 2 斤
6	5	銀 2 両束修, 膏藥銭 36 文 (学), 銭 100 文	瑞金 2 角, 亥 2 斤
7	9	光応買書銭 94 文, 銭 100 文 (学), 銭 100 文 (学付火差)	亥 1 斤半, 瑞金 3 角, 香油 2 斤, 付干 5 斤
8	3	買書銭 1400 文, 銭 100 文 (学付火差), 銭 30 文	
9	2	銭 200 文院考	亥 1 斤
10	6	老師菜金銀 0,4 両, 請老師銭 68 文, 賀先生銭 500 文	瑞金 1,5 角, 付干 2 斤
11	6	学賀銭 91 文, 賀銭 538 文 (学用), 銭 36 文 (学)	亥 2 斤, 麻求半斤, 花生 4 両, 肝半 (斤)
12	0		
総計	55	銭 7826 文, 銀 15,62 両	

『家支』(嘉慶 7 年) により作成

表5 王氏家族の医薬支出状況

月	回数	金額	備考
1			
2			
閏 2			
3	1	34 文	
4			
5	5	281 文	
6	3	60 文	洋参
7	3	47 文	藥羔半 (斤)
8			
9	3	301 文	
10			
11			
12			
総計		銭 723 文	

『家支』(嘉慶 8 年) により作成

表6 王氏家族支出の主要な項目・金額

月	日常生活	社会交際	生産・投資・税等	特殊事項
1	皮椅錢 680 文			銀 5 錢執見礼
2	酒錢 192 文, 錢 36 文打床工錢	銀 0,6 兩渚口賻敬		錢 120 文付鉄匠
閏 2	銀 1,06 兩買花板, 錢 80 文銅匠工錢		由单 25 文	錢 500 文尚手邑用, 銀 1 兩定嫁裝
3	錢 1600 文付与山工錢, 錢 780 文買三貴兄磚, 錢 4246 文磚匠工錢, 土布錢 840 文		錢 125 文土地整理, 錢 100 文閨帝会土地整理	錢 2200 文元緞 (高級衣料)
4	錢 9800 文買穀, 錢 216 文葉元工錢	轎錢 75 文		会酒 4206 文 (錢会の輪番)
5	工錢 290 文, 染錢 219 文, 錢 1000 文買錫瓶		銀 6,21 兩完糧, 錢 1000 文買田皮	錢 63 文閨帝会酒
6	土布錢 650 文, 錢 4080 文買磚瓦, 銀 45 兩買穀		錢 152 文車水	靴銀 2,58 兩, 磁罈銀 0,49 兩, 衣褲銀 3,33 兩, 布銀 1,85 兩, 銀 1,47 兩打首飾
7	錢 160 文買磚, 錢 2500 文磚力		錢 427 文車水	土布 1 丈 (招子), 暖房錢 27 文, 錢 100 文付接生, 錢 230 文首飾工錢
8	錢 296 文竹匠工錢, 土布 3 丈 3 尺, 錢 2250 文買花 (綿), 酒錢 852 文 (11 回)			銀 6 兩嫁裝, 錢 1040 文漆匠工錢, 錢 620 文擡嫁裝等
9	煙錢 12 文 (2 回), 錢 200 文彈絮, 酒錢 1296 文 (13 回), 錢 1000 文丑 (牛肉)	儲文兄 香儀 銀 1,05 兩		錢 485 文五有工錢, 錢 850 文龍慶工錢, 錢 200 文銀匠工錢
10	錢 306 文炭		嘗米錢 2040 文, 錢 202 文土地整理, 銀 1,15 兩完糧	銀 17,27 兩招福送日子 (婚約関連)
11	土布一疋 (4 丈), 酒錢 10 文, 炭 45 文, 招福皮套 (高級衣類) 3700 文	賀中孚叔銀 0,4 兩, 錢 100 文買丑送秀元兄	錢 1800 文回復園差	
12	錢 1840 文買穀, 煙 36 文 (3 回), 綿帽銀 0,9 兩, 丑 (牛肉) 錢 4400 文, 錢 200 文銀匠工錢, 錢 200 文小玻璃鏡 2 面・大玻璃鏡 1 面, 錢 4900 文買穀 35 秤	盒力 (配送 3 回) 錢 560 文		堂衆銀 2,09 兩, 接轎銀 0,4 兩, 錢 5600 文散使, 錢 1600 文茶姉, 錢 1584 文針工, 道士 100 文, 尚轎錢 600 文, 炳轎錢 200 文, 錢 840 文裱函, 錢 960 文国發工錢

『家支』(嘉慶 8 年) により作成

表7 王氏家庭の教育関連支出

月	回数	項目・金額	項目・実物
1			
2	4	銀2両・錢400文光顕往学	香油1,8斤, 切刃■, 銅帳鉤1付
閏2	3	錢1600文光顕学用, 錢70文報子, 錢100文正案報錢	
3	2		菜油半斤, 亥10斤(光顕学)
4			
5	1	光応学俸400文	
6			益記1角(招禄学)
7	3		香油半斤, 益記1角(招禄学), 牛 粉1斤・雪片1■送先生
8	4	錢2000文(光顕府考), 銀2両束修, 光慶学俸錢200文, 錢100文報錢	
9	2	錢200文接考担	香油半(斤)
10	3		香油1,8斤
11	6		香油1,5(斤), 寸金半, 益記2角
12	2	束修銀2両, 光応学俸錢400文	
総計		錢5470文, 銀6両	

『家支』(嘉慶8年)により作成

医療・医薬関連の支出が突出しており、家族のだれかが重篤な病気にかかったと考えられる。嘉慶8年には嫁入り道具関連等、また工事関連の人件費、高級衣料などの多く支出があった。この年、女性構成員の招子の婚礼があり、嫁入り道具(衣類, 家具, 貴重装身具などを含む)の準備に銀と錢を合わせて63両1錢を使っている。婚礼や家屋の建造(修繕)などがあったためにこの年には高級食材や酒の消費が多かった。嘉慶7年には書籍等を含む教育関連の支出が多かったが、表7の嘉慶8年の支出は少ない。しかし帳簿の最後、「光顕学用」という記録があった。記録は一年間の支出ではなく、一部であったが、既に27歳になった光顕はまた科挙受験の道に励んでいて、様々な支出があったようである。関連事項について整理したものが表8である。

表8が表7と重なる部分があるかどうかは不明であるが、学校(塾)に在籍する勉強だけではなく、光顕は嘉慶7, 8年に試験を通して生員資格を獲得した

表8 光顕関連の支出

月	金額・事項	実物・事項
1	銭500文(叫船往到湖), 銭1600文・銀4両(付煥其接先生)	
2	銭2000文, 銀2両	
閏2	銀9両, 銭3000文	亥10斤, 益記半斤, 求1斤, 笋尖2斤
総計	銭7100文, 銀15両	

『家支』(嘉慶8年)により作成

ように見える。学校の活動や決まった試験の参加などにも多くの出費があり、出世のため、先生或は教官との付き合い(贈答)も必要であった。嘉慶8年の光顕の教育・受験関連のみの支出は、銀と銭を使用し、銀で計算すれば、46両6銭7分を費やしていた。因みに家族の教育投資は、収穫を得たようで、32世の兆瀚(光顕)と兆治(招禄)は、県学の生員の資格を有し、兆濂(招福)と兆潤(招壽)は科挙に成功できなかったが、捐納で「国学生」になった。

確かに表1-8までを見ると王氏家族はこの二年間、高級栄養品、医療、教育関連、食材・食糧、結婚関連等の支出は大きな割合を占めていることが分かる。帳簿の記載の一部の項目の支出には季節性があり、特に社会関係の維持などの支出は主に節句、旧正月と年末、五月の端午、八月の中秋に集中していた。食材・栄養品や日常用品に燕の巣、朝鮮人参、海參、砂糖、玻璃鏡、玻璃燈(ガラスランプ)などは、外部から仕入れたものであり、高級衣料などについて、「炳記」という分節帳簿に饒州府や南京から買ったとの記載があった。

王氏帳簿に関しては、道光年間の情報があり、記録は完全ではないが、家計の一部の特徴が分かる。嘉慶年間の家庭収支を参照しながら、収支総計のあった年に関して整理したものが表9である。

道光11年の『家支』に前五年間の家庭生活収支のメモがある。詳しい収入・支出の項目およびその総額はないが、収支バランスに関する数字があった。

表9 道光年間 王氏家族の家庭生活の収支状況

年代	収入	支出	収支バランス	備考
6年			70千413文赤字	道光11年『家支』
7年			43千209文赤字	同上
8年			49千415文赤字	同上
9年			17千826文赤字	同上
10年			35千813文赤字	同上
11年	菓子各物 銭9千400文、米28千628文、猪24千790文、谷12千700文、房収75千630文	186千92文造屋木料、磚瓦並門方石。一切各匠雑工在外		同上
15年		129千108文		同14、15年『家支』
16年	56千644文	121千537文	64千893文赤字	同16、17年『家支』
17年		112千260文	37千213文赤字	同上
18年		78千770文		同18、19年『家支』
19年		121千517文、1千200文邑過礼（結婚式）亥魚、内学俸過礼用71千		同上
29年		43千113文		同29年『家支』
30年		59千430文		同上
咸豊元年		129千837文（前年結婚費用も含める）		同上

『王氏帳簿』により作成

三、家計簿から見る多角経営の状況

嘉慶7、8年の『家支』の支出記録を見れば、王氏家族は明清時代の徽州地域において、経済的に余裕があり、高い水準で日常生活を営んでいたと思われるが、収支或は記載の特徴に関して収入の部は支出より遥かに少なかった。また

表9 道光時期の状況を見て、連年の「透支」＝赤字は非常に目立った。単なる帳簿の収支からこの家族の収支バランスが大きく崩れていたと見られる。しかし長期的に「巨額」の赤字で日常生活における高い支出＝消費レベルを維持することは徽州地域の農村社会において可能であったか、またその理由はどこにあったのか。

既に述べたように帳簿の持主は、王氏30世啓邦（1720-1782）の二人の息子元敞（1748 - 1816）、元要（1760 - 1816）およびその子供、孫からなる家族である。帳簿を記録する時点で啓邦は乾隆47年に亡くなっており、家族の主役は、長男の元敞と次男の元要であり、二人とも結婚し、子供をもうけている。家庭の経済活動をリードしていた長男元敞、次男元要は、捐納を通して、「国学生」（「監生」）の資格を得ている⁽¹⁴⁾。27歳になった元敞の息子兆瀚は、まだ科挙勉強や試験に励んで、帳簿の記載から生員の資格を取得したように見られる。次男の元要は三人の息子を挙げて、兆濂（乾隆52年生まれ）、兆治（乾隆59年生まれ）、三男兆潤（嘉慶2年生まれ）を有し、また二人兄弟の子供の中に娘もいた⁽¹⁵⁾。嘉慶8年の時点で啓邦の長男は孫を含め三世代で、次男は二世代で同居する大家族であったと見られる。啓邦は二十数年前に他界し、妻陳富芳も数年前に亡くなり、雍正時期に生まれた側室程氏の生卒については記録がないため不明である。啓邦の息子たちは嘉慶前期に分家したのか、また分家したとしてもどこまで家産を分割したのか、わからないが、帳簿の記録から、共通の経済基盤をもち、日常生活を営む大家族であると推測できる。しかしこの家計簿の記録は完全ではなく、収入の部には実物のみで、貨幣収入が反映されていない。毎年の税金、一部小額の農業関連施設の整備、直接的な生産に対する投資や一部の貨物に関する支出しか記録されていない。つまり、家計簿は家族の収支の全部ではない。例えば、咸豊6年の『家支』は、嘉慶、道光年間の『家支』より完全な収支は記録されておらず、収支バランスの情報は不明であるが、同じ年にほか6冊の帳簿があり、「本村」、周辺地域の村落、即ち取引先＝

個人、社会团体、商号の下に毎年の取引と金額が記録されている。6冊の帳簿によれば、この家族は多くの債権、即ち取引先にとっては債務、を多く持っていたとわかる。

それでは、この家族はどのような経済活動を行っていたのか。王氏帳簿のタイトルから、農業の経営、土地と山林等の租佃、米やトウモロコシ等の食糧生産、茶の生産・製造・販売、商品販売を行っていたようである。

明清時代、地元での土地経営を通して徽州地域の食糧生産者は、大金持ちになったケースは殆どなかった。富を集めたケースは、主に商品流通、とりわけ専売品＝独占的商売——塩、及び金融業の質屋、国際貿易などでの巨額利益が得られる領域、或は多様な商売を営むものであった⁽¹⁶⁾。啓邦一元敵を中心とするこの家族は地元で多くの土地等を持っている。しかし徽州地域において、土地の収益は、一家族の一般的日常支出を賄うことが可能であるが、高い生活水準を維持するものではなかった。したがってこの家族の主要な経済活動は商業に従事するほかならなかった。

では、この家族は、いつから何の商売に従事したのであろうか。族譜に記載される本道以下の子孫の婚姻状況（妻や側室を保有する数）、男性子孫の人数、下級科挙資格の保有数などから、王本道の子孫の各系列は地元において相当高い生活水準を保っていたことが垣間見られる。しかし、族譜と『祁門県志』で25世の王本道以下、「生員」のような下級科挙資格の保有者を輩出したことが確認できるものの、「従九品」以上のもの、即ち地方社会において官界進出の成功者に関する記載はなかった。

族譜によれば、本道は、出世する前には身内に騙された影響で貧しかったため、子孫は、彼の代＝万暦年間から商売を始め、何らかの形で国内の遠隔地商業、国際貿易のブームに乗って、一部の男性構成員の受験教育及び科挙資格の獲得を支えてきたようである。啓邦一元敵を含む本道系の各家族は主に商業活動を通して富を手に入れたと考えられる。元敵の状況に即してみれば、祖父29

世嘉伊（康熙20年—乾隆11年）は五人の男性兄弟の三男で前後三人の女性と結婚していた。長男の啓邦（康熙58年—乾隆47年）は、二人の息子を挙げた経営者である。嘉慶8年『家支』の回想メモを見る限り、遅くとも乾隆後期より、懐万一元敵ら親子は活発に商業活動を行っていた。

乾隆42年に五得叔と「合伙」し、「観音楼万順酒坊」を開店し、経営不振のため、二人とも70両の損失を出して五得叔が撤退した。乾隆43年に王懐万は張朋三、張福大、胡永章と各々50両を出資し、その店を引き受けた。経営者は主に懐万、即ち懐万一元敵ら親子であり、当年の営業利益は102両あったが、翌年またこの店を他人に譲渡し、祁門县城東街口に移って、改めて酒店を開いた。乾隆45年から塩、食用油、食糧の経営を追加し、商売は順調に推移し、「股分」の配当の他、王懐万一元敵らは、数年の間、店の資本金を200両から3000両余りにまで積み上げた。しかし乾隆53年5月の水災で、経営仲間張福大兄弟の水死、店の建物と商品等の流失により、大きな損失が出たが、幸いことに、江西饒州府の店に貯めた資本金700両のみは残っていた。その資金の処理について整理したものが表10である。

各債務を返済し、約200両の残額で乾隆53年に「泰来塩店」を開き、当年の利益は8両あり、翌年に利益は180両にのぼり、その中から135両を割いて「万順煙店」を開業した。投資のほか、乾隆54年に残した流動資金は258両あり、

表10 祁城東街店余剰金の処理

番号	項目	金額(両)	備考
1	該程村礪胡永章銀	182	借金の返済
2	該張福大存会本銀	100	借金の返済
3	該五得叔銀	60	借金の返済
4	該周公祀銀	90	返借金の済
5	該升兄銀	20	借金の返済
6	送張福大父銀	50	贈与、張福大兄弟の水死と孫の扶養関連
総計		502	余剰205両——記載のまま

『家支』（嘉慶8年）により作成

塩店の経営状況も良好であったため、55年の利益は202両、56年は170両、57年は30両あり、それを加えて乾隆57年までには計660両の流動資金もあったが、何らかの理由で王元敞は食用塩の商売から撤退した。

乾隆58年に王元敞は独自に「永春米店」を開店し、その年の営業利益は70両あり、嘉慶元年に米店が分割されるまで、4年間の利益は495両あった。

乾隆59年に王元敞は550両を出資し、曹正大、王心一、王応群と四人で改めて米店を開業した。この米店に関する詳細な情報はないが、資本規模が大きく、地元産の食糧ではなく、主要な食糧産地から米を仕入れ、徽州地域に販売する遠隔地商業を営んでいたらしい。さらに180両を投資し、儲文と一緒に江西省の饒州府で砂糖等を販売する店を開業したが、この商売は利益が出なかった。

乾隆54年の「万順煙店」の初期投資は、王元敞の135両を除いて、「馬翔千会」、即ち金融組織から200両を融資してもらい、また儲文も店の経営仲間として資金を投入したが、店の経営は不振で赤字という結果になってしまった。

嘉慶元年正月、乾隆58年（三年前）に開いた「永春米店」を閉めて、何らかの支出55両を除いて、495両が残った。この資金の使用についてまとめたものが表11である。

乾隆60年に王尚文（元敞）は、また張仞千、鄭君孚、謝聖輝と一緒に「万順

表11 嘉慶元年 永春店余剰金の支出

番号	項目	金額(両)	備考
1	家用並做墳	100	乾隆60年10月
2	儲文訟和事	95	訴訟の和解
3	南・東路土坑	200	土地の購入？
4	万順煙店会、胡於采会、孫聖範会、馬天石会	100	銭会の出費
総計		495両	

『家支』（嘉慶8年）により作成

煙店」を引き受けた。今までの営業赤字は200両あったため、嘉慶6年に複数の知人や親戚から400両の営業借金を追加した。増資方式と資金源についても表12である。

そのほかに乾隆末、嘉慶初の一つの収入記録があり、その性格と特徴を明らかにするために作成したものが表13である。

この2820両はどのように使用されたのかは不明であるが、商業経営の資本として運用されたものと推測できる。

安徽省、即ち安徽省の省都安慶で「長豊京貨」という店を開業した。この商店の資金については主に借金や「銭会」から融資であり、経営状況は、記載によれば、「実蝕」の金額＝支出か、経営損か不明であるが、負債らしきものが銀833両もあった。資金源に関してまとめたものが表14である。

注意すべきことは、表14の「該捐監賠銀」という支出項目であり、お金で「国学生」という資格を得ているのである。族譜の伝記によれば、嘉慶5年時点で、元敞兄弟は捐納を通して、「監生」資格を獲得していた。

元敞らは、また上述の店等を持つと同時に、或はその前後にほかの店も経営していた。家計簿と帳簿には、商店のほか、土地、山林等を多く所有していて、不動産は「本村」の範囲を超えていた。また多種多様な生活用品の仕入れ、販売を含め、住宅の賃貸などの経営も行っていた⁽¹⁷⁾。商店がどこにあったのか

表12 嘉慶6年 万順煙店の増資表

番号	項目	金額(両)	備考
1	借夢桂銀	50	借金
2	借接桂銀	50	借金
3	借長寿銀	50	借金
4	借福發銀	50	借金
5	借五得銀	100	借金
6	領遜正楷会銀	100	銭会融資
総計		400両	

『家支』（嘉慶8年）により作成

表 13 乾隆末嘉慶初 王氏家族の収入表

番号	収入項目	金額 (両)	備考
1	収土坑苞芦銀	102	地租収入
2	収張仞千銀	50	
3	収鄭■銀	50	
4	収洪代臣会銀	12	錢会
5	収西関洪石街店銀	70	商店の収入?
6	収光遠■田佃銀	68	土地売買収入
7	収天来立票銀	50	「作五年還本」, 借金
8	収万順煙店末会銀	100	錢会
9	収胡於采末会銀	100	錢会
10	収白石塢謝公邑主去銀	100	「為周公祀坎山」
11	収孫聖範会銀	50	錢会
12	収邀首会銀	300	錢会
13	収(複)邀首会銀	300	錢会
14	収歴口和興約分	1200	
15	収末領会銀	250	錢会
總計		2820	

『家支』(嘉慶8年)により作成

表 14 「長豊京貨」経営の負債表

番号	項目	金額 (両)	備考
1	該容慶銀	50	借金
2	該東有・西有銀	120	借金
3	該余封五銀	66, 66	借金
4	該捐監賠銀	66, 66	支出?
5	該捐監賠銀	100	支出?
6	該倪眉山銀	30	借金
7	該儲文銀	200	「作十年還本」
8	該永聖兄会	100	借金 (金融組織から借金)
9	該帽緯客銀	55	借金
10	該馨得銀	50	返済 25 両
總計		833	

『家支』(嘉慶8年)により作成

は不明であるが、複数の雑貨店を持っていたと推測できる。要するにこの家族は農業生産から商業活動まで多角的経営活動を行っていたことが確認できる。

嘉慶8年『家支』の遡及的な内容のメモから見れば、この家族は、絶えず商業活動に力を注ぎ、新しい商売を起業し、同時にいくつかの商店を経営していた。安徽省の安慶府、江西の饒州府、祁門県の県城などに店を持ち、商売を行ない、経営の業種とその内容も多種多様であった。注意すべきことは投資規模の大きさである。祁門県城の店の資本金が3000両銀を上回り、共同所有の店への一人の出資額は550両に達している。商号、即ち企業の経営形態は独自で商号を持つこともあるが、その多くは「合伙」、「合股」即ち株式のような会社所有・経営であった。

現代の銀行等の融資制度がなかった時代に商業投資の資金は、どのような形で集めたのであろうか。商売を行なう人の商業資本は、必ずしも家庭内の所有資金に頼らず、様々な形で資金を集めたと考えられる。その主要な方法は三つある。一つ目は所有・経営者が権利所有の割合＝股分の分割によって経営の仲間や協力者からの出資を得る方法。二つ目は知人等からの借金（利息付き）。三つ目は「銭会」、即ち融資組織を作り、資金を集める方法。徽州商人の商業資本の獲得において銭会という融資方式は非常に重要であり、よく使われる伝統社会の金融手段であった⁽¹⁸⁾。

王氏の経済・経営行為から見れば、共同投資・経営は、経済活動の常態であった。共同出資・経営によって利益を分かち合い、一部の社会的資源を共有する徽州商人のこうした投資・経営特徴は、経営のリスクを分担し、複数の投資者の社会関係や人材を利用できて、また多くの資金を集めやすいというメリットもあった。徽州商人のこうした経済活動特徴の形成は、血縁・親戚・地縁関係者という側面から理解される場合が多いが、利益の共有、利益分配の形、或はその形態が決定的な役割を果たしていた。

四、おわりに

本稿では、筆者が偶然入手した52冊の清代の帳簿について、資料の所属関係などの情報がまったく不明であった状況から出発し、記録内容の相関性と地方史料を合わせた考証を通して、徽州府祁門県、王氏家族、箬坑村、王元敏等の重要な事項まで辿ることができた。

ところが徽州地域の地方文献を本格的に調べてみると、王氏家族は、明清時代の地方社会において政治・社会的地位及び影響力は勿論、経済領域において殆ど知られていない存在であった。したがって経済や商業の視点で見ても乾隆、嘉慶、道光年間の王元敏らの王氏家族は、祁門、徽州地域のごく普通の家族であり、多様な商業活動を行っていたものの、中小商人であったと言える。

家庭生活のもう一種類の日記として、王氏の家計簿（家支）は、完全な家庭収支の記録ではないが、嘉慶7、8年二年間、殆ど毎日の支出動向を反映したものであった。確かに一部の項目の数量統計と精算に関する扱いは難しい。しかしこうした帳簿群は、様々な貴重な社会経済情報が多く含まれていて、祁門県箬坑王氏家族、即ち、我々が清代の南方農村における普通家族の経済生活の世界を理解する糸口を提供し、今後の清代経済史・社会史研究の多様な展開に役に立つものと考えられる。

本稿で王氏家族の嘉慶7、8年の家庭支出の状況等を整理し、初歩的な分析を試してみた。この家族は18世紀末、19世紀初に祁門、徽州周辺地域において、農業や山林・茶の経営のみならず、商店の開設、酒、米穀、食用の油、塩、糖、雑貨などの商売を行ない、多様な経営活動を活発的に展開していた。しかしこうした経営、特に商売を展開する資本はどこから集めたのか。主に今までの研究の中では殆んど注目されなかった「銭会」、即ち互助的金融組織を通して集めたと考えられる⁽¹⁹⁾。また、親友からの借金も利息を払うのが一般的なことで

あった。家庭消費や支出には今まで明らかにされていない点は、裕福な一般人の家庭が健康＝医薬などの支出のある時期には多かったことである。また教育関連の年間支出も高く、家庭の教育関連の支出から18世紀、19世紀初において徽州地域において社会競争の激しさが窺える。

さらに、王元敵家族の帳簿、及び休寧黃氏『家用収支帳』などの資料から得た知見を踏まえて、清代経済史研究について、いくつかの可能性を述べたい。

明清時代の社会経済研究は、様々な領域や側面で多くの成果が積み重ねられてきた。しかし農村社会、或は日常生活レベルで、商品経済、または商業化は、どこまでに浸透していたのか、詳細、かつ連続した実証に適する資料が欠如しているために、はっきりした実像がまだ描かれていない。祁門王氏の『家支』、休寧黃氏『家用収支帳』は、18世紀から19世紀前半にかけて、農村社会・山間部における「市場経済」の状態、「市場」がどこまで展開していたのかを、郷村社会、とりわけ家庭の日常生活レベルで考える際に、多くの手がかりを提供している。多くの側面から議論の余地があるが、ここで王氏家族、黃氏家族の日常生活から「商業化社会」の成立について二点を指摘しておきたい。

一つは、流通する商品の空間関係についてである。二つの家族が高い金額で購入した高級栄養品・薬品である人參、燕の巢、鹿等の原産地は、徽州地域ではなく、中国の東北地方か、朝鮮半島か、また東南アジアかであった。食品類や海産品が多くみられるが、主に広東か、東南沿海地域、また国外から仕入れたと考えられる。一般の家庭で使われる砂糖や煙草等も遙かに離れた生産地から運ばれたものであった。徽州地域に流通したこれらの商品は、市場空間の広さと流通の発達を示している。

もう一つは、徽州社会における商業化の展開についてである。王氏、黃氏の家計簿に親子、夫婦の間の貸借やその返済がはっきり記録され、家庭内の労働や親戚の手伝いなども金銭で計算し、報酬を支払っていることがわかる。こうした金銭感覚は、自足自給の社会、また曖昧な表現、互酬の相互関係をもつ農

業社会の人々の経済行動とはかなり異質的なものである。

日常支出の項目を見て、徽州地域においてすべての生活関連の用品、労働は商品であり、自家生産できないもの、たとえば、魚、肉類などは勿論であるが、食糧、燃料（薪）、野菜、調味品なども商品として日常的に貨幣を媒介に交換していた。それ以外に、細かい家庭内の労働を含む多種多様な需要の中で多くの業種に関するサービス業が成長し、発達していた。例えば、一定距離の客や幼児の送迎、プレゼントの運搬、人の空間移動などは、一般的に専門的な業者（轎や船）を雇って行なった。特殊の日記である家計簿から、人々の日常生活レベル、人々の経済行動（消費）において、商業が非常に発達する徽州地域のイメージが鮮明に浮かび上がってくる。

以上、主に52冊帳簿の中の1冊を利用し、清代祁門王氏の社会経済活動について初歩的な検討をしてきたが、さらに一族の社会経済活動の全貌を明らかにする作業を進める必要がある。その研究は今後に譲りたい。

附記：本稿は日本学術振興会科学研究費補助金研究成果の一部である（科研C「16 - 19世紀における遠隔地商業環境と中国の社会経済構造に関する研究」（番号26370836、代表者熊遠報）、科研B「貨幣の多元性についての国際共同研究：世界史における貨幣間分業とその比較」（番号26285073、代表者黒田明伸）。一部の内容は2014年2月1日に開催された東京大学東洋文化研究所シンポジウム「清代経済史の諸問題」に報告し、ハーバード大学に滞在する間、修正を行なった。記して査読下さった先生を含め、関係の先生方に感謝の意を表したい。

- 1 徽州文書を利用する明清時代史の研究は、「徽学」と言われて、膨大な研究が積み重ねられてきた。代表的な研究は、傅衣凌「明代徽商考」（『福建省研究院研究彙報』第2期、1947年、後『明清時代の商人及商業資本』人民出版社1956年）、藤井宏「新安商人の研究」（『東洋学報』第36巻第1 - 4、1953 - 1954年）、葉顯恩『明清徽州農村社会与佃僕制』（安徽人民出版社1983年）、章有義『明清徽州土地関係研究』（中国社会科学出版社1984年）、『近代徽州租佃関係案例研究』（同1988年）、Harriet T. Zurndorfer, *Change and Continuity in Chinese Local History: The Development of Hui-*

- chou Prefecture, 800 to 1800* (Leiden, E.J.Brill, 1989.), 王鈺欣・周紹泉編『徽州千年契約文書』(花山文芸出版社, 1993年), 張海鵬他『中国十大商幫』(黄山書社1993年), 張海鵬他『徽商研究』(安徽人民出版社1995年), 王振忠『明清徽商与淮揚社会變遷』(生活・讀書・新知三聯書店1996年), 樂成顯『明代黃冊研究』(中国社会科学出版社1998年), 唐力行『明清以来徽州区域社会經濟研究』(安徽大学出版社1999年)。陳智超『美国哈佛大学哈佛燕京图书馆藏明代徽州方氏親友手札七百通考釋』(安徽大学出版社2001年), 中島樂章『明代郷村の紛争と秩序』(汲古書院2002年), 『徽州商人と明清中国』(山川出版社2009年), 拙著『清代徽州地域社会史研究』(汲古書院2003年), 白井佐知子『徽州商人の研究』(汲古書院2005年), Joseph P.McDermott, *The Making of a New Rural Order in South China.I. Village, Land, and Lineage in Huizhou, 900-1600* (Cambridge University Press, 2014) などがある。
- 2 徽州地域の収支帳簿文書は大体この類である。前掲周紹泉他『徽州千年文書(清民国)』第8巻, 雍正11年—乾隆8年休寧黃氏『家用収支帳』に家父長は遠隔地へ仕事に出掛ける時に家用の収支記録を弟か息子かに委ねたと見られる。
 - 3 筆者の所蔵『王氏帳簿』の『貨源』(咸豊6年)に一つの「合伙」契約の下書きがあり, 股分(株)を持っている者のために詳細な収支の記録が必要であると明記されている。その原文は以下である:「立合夥約人葉△△, 王△△, 縁身三人合夥開張生理, 各出本钱△△△千文, 共成本钱 千文。所有店内一切等事, 往来移借客本, 公全相商, 俱要尽心竭力, 帳目載記明(確?), 不得擅自出入已支, 毋許推縮徇私肥己。撰(賺)蝕率照帳目清派, 如違查出, 定行将本一併扣除, 店内糸毫無分。今欲有憑, 立此合夥一樣三紙, 各取一紙存照」。
 - 4 同治『祁門県志』巻36。
 - 5 同治『祁門県志』巻10輿地志, 寺觀。
 - 6 同治『祁門県志』巻24人物志, 忠義。
 - 7 嘉慶『環溪王氏統修家譜』巻下P46-47。
 - 8 光緒『環溪王氏家譜』巻首, 凡例。
 - 9 嘉慶『環溪王氏統修家譜』巻下。
 - 10 現地調査を行なう際には, 80歳の元教師王進和氏, 村の幹部王洪修氏ら, また黄山学院の韓寧平先生と方輝先生等の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
 - 11 咸豊年間に銀に関して両, 錢等の単位ではなく, 元という単位である。
 - 12 銀・錢の為替は時期, また地域によって異なっていた。
 - 13 楊端六『清代貨幣金融史稿』(武漢大学出版社2007年)第三編, 岸本美緒『清代中国の物価と經濟變動』(研文出版1997年)第一章を参照。

收支記録から見た徽州家庭の日常生活

- 14 嘉慶8年の回想メモに捐監による166両以上の支出記録がある。
- 15 嘉慶『環溪王氏統修家譜』に娘に関する情報がない。
- 16 前掲徽商研究、商幫研究等の成果を参照。
- 17 王氏帳簿『本村 咸豊6年』。
- 18 徽州商人の資本について、藤井宏、葉顕恩、張海鵬等の研究があり、「銭会」という金融手段は重要視されていないが、王氏帳簿と汪氏書簡『三世手澤』から、「銭会」は商業資本の獲得に最も大きな金融の役割を果たしたと指摘したい。
- 19 銭会に関する研究は別稿に譲りたい。

收支账簿中所见徽州地区普通家庭的日常生活

——以清代祁门王氏的日常收支账目为中心——

熊远报

本文经过对偶尔入手、所属关系不明的 52 册家庭账簿的考证，确认其为徽州祁门县箬坑村王元敞这个普通商人家庭嘉庆至同治年间近百年日常生活收支、货物进出、债务、金融相关的原始记录。作为另一种日记的家庭收支账簿，具体记录了一个徽州商人家庭日常生活的基本状况，为研究传统中国社会家庭的日常生活与经济活动、立体构筑清代徽州地区普通人的社会经济生活面貌提供了十分详细的资料。

本论文选取账簿中保存状态完好的嘉庆七、八（1802-03）两年的家庭生活收支记录，进行了整理与分析。十八世纪末、十九世纪初的王氏家族在祁门经营农业、茶叶，从事油、盐、粮食、烟酒等日常生活用品的贩卖，与人“合伙”经营，拥有多家商店，有较大规模的商业投资，进行多种经营活动。与学术界过去的成果不同，本论文强调“钱会”这种互助性金融组织提供的资金与有息借贷是徽州商人商业经营的重要来源与支撑。以一年为单位观察王氏家庭，医药支出和教育与科举考试支出比较突出。这某种程度反映了徽州社会的健康重视倾向与医疗医药环境，以及当地获取各种社会资源竞争的激烈程度。

祁门王氏账簿和一些徽州账簿的记载，对清代日常生活中“市场经济”、商业化进展程度等的理解提供了新的可能性：1、徽州流通商品的产地非常广泛，包括中国各地区，也有朝鲜半岛与东南亚诸国。2、徽州的日常生活中，个体权利意识受到重视，家族内亲子、夫妇间的借贷与返还过程在收支账目中得到明确记录，亲族间家务帮助等也明确以金钱计算报酬。日常生活用品领域中的商业化

与专业化程度加强，以货币为媒介的交换关系日常化，服务行业的范围相当细节化，类似接送小孩等事务也成为以货币交换的劳动领域。这些都在一个侧面显示内陆农村的商业化程度，可以改变农业社会自给自足、重视互酬关系的基本形象。